特集論文（『社会分析』34 号，2007，111 ～128）

「体育会系」女子学生のジェンダー観
―「大学生のスポーツ・価値観に関する調査」より―

中村 晋介

1．本稿の目的

スポーツ活動への参加と意識との連関に関する社会学的研究は、ジェンダー論の文脈、スポーツ社会学の文脈、そして教育社会学の分野において複数存在する。その中には、本稿と同じく、学校の部活動やサークル活動という「場」で展開されるスポーツ活動に焦点を当て、それへの参加と意識との連関を探ったものも少なくない（e.g.川辺 1974; 深沢 1977; 丹羽・種村・長沢 1989; 羽田野 2004; 甲斐 2000; 高井 2005）[1]。

ただし、これらの先行研究が対象としてきたものは基本的に「男子部活動」、あるいは「運動部に所属する男子学生」であったことには不満が残る[2]。関係の非対称性、あるいは支配／被支配という構造の再生産過程を見る場合、支配される側の立場に立つ人びと、あるいはその構造において傍観者的な位置、あるいはマージナルな位置に立つ人びとにも視野を拡大し、総合的な分析を展開する必要があるからだ。より具体的にいうならば、ジェンダーとスポーツ集団との関係についての社会学的な分析モデルを洗練させるためには、女子学生――セジウィック（1985=2001）およびその追随者たちのいう「ミソジニー」や「ホモフォビア」の原理によって劣位に排除された人びと――や、運動とは無関係な生活を送っている男女学生を視野に入れた研究実践によって、従来の研究を補完していく必要がある。

その中でも最も重要なものは、女子学生を対象とする社会学的視線にほかならない。ブルデューが指摘したように、社会学的に権力現象を捉えようとする研究者にとって不可欠なものは、権力作用の中で劣位に置かれている者が、慣習行動

を通してその理不尽な権力を受容していく過程を照射する視線であるからだ（Bourdieu 1992:170）。

この目的を果たす第一歩として、本稿は大学に通う女子学生のジェンダー観念にスポットを当てる。特に注視するのは、運動・スポーツのために構成された部活動・同好会・サークルに所属している女子学生（以下、「体育会系の女子学生」と表記。なお「体育会系」という単語の使い方に関しては注５参照）が抱いているジェンダー観や規範意識である。

ここでまず確認すべきは、「体育会系の女子学生」が抱くジェンダー意識が（通常の意味において）保守的なのか、それともリベラルなものなのかという議論である。この点については２つの仮説が提示されよう。その第１は、スポーツに親しんでいる女性は、それ以外の女子学生よりも保守的なジェンダーを抱いている（より正確に言えば、保守的なジェンダーを選び取っている）とする仮説である。スポーツの場に入っていった女子学生は、そうでない女子学生よりも男子学生との身体能力の違いを目の当たりにする機会が多い。そうであるが故に「劣った身体能力の持ち主＝男性支配に従属すべき存在」としての女性像を受け入れてしまうという議論が、この仮説の背景にある（岡本 2000:146）。

その一方で、大学に入った後も運動部に所属し続けている女性は、むしろ保守的なジェンダー観に否定的になるという仮説も提起され得る。大学の運動部や同好会などで専門的・日常的にスポーツに親しんでいる女子学生は、一般の「軟弱な」男子学生よりも運動能力が高いが故に、むしろ男女同権的な意識を持ちやすくなるとも考えられるからだ [3]。この仮説は、彼女たちの生活が「女性だけの集団」である女子運動部を軸として構築されていることからも支持されそうである。女性だけの集団に身を置く時間が長いが故に、体育会系の女性たちはそれ以外の女性たちよりも、保守的な女性像への同調圧力、すなわち「（伝統的な意味において）女性らしくあれ／おしとかであれ」という圧力を受ける機会が少なくなる。この同調圧力は、もっぱら男性から女性に向かう視線の上で発動するからだ。そして、こういった女性たちの多くは、中学生～高校生時代においても（女子）運動部に所属してきたはず＝社会化過程において上記の同調圧力を受ける機会が少なかったはずである [4]。

本稿は、まずこれら仮説の検証から出発する。その上で、そのほかの意識（ナ

ショナリズムに関する意識、結婚式の進め方、友人関係の規範意識、社会に関する関心、大学生活充実度など）についても、体育会系の女子学生とそれ以外の女子学生とを対比させつつ議論を進める[5]。最後に、これら意識の連関関係をチェックしていくことで、①体育会系の女子学生が抱いているジェンダー観のありよう、②およびそのようなジェンダー観が構築・再生産されていく過程の理念型を提示する。

本稿で使用する量的データは、福岡県立大学生涯福祉研究センター（現：福岡県立大学附属研究所生涯福祉研究センター）「男女協同参画社会の実現に関する研究プロジェクト」が 2004 年度～ 2005 年度にかけて実施した調査研究（大学生のスポーツ・価値観に関する調査）である。調査の概要を以下に示す。なお、本調査の遂行に関しては、複数の社会分析学会会員に暖かいご支援・ご協力をいただいた。記して感謝の念を示すものである。

調査期間：2004 年 12 月～ 2005 年 3 月
調査対象：西日本の 14 大学（国立 4、公立 3、私立 6）に通う大学生
調査方法：自記式調査票 3500 票を下記 a ～ c のルートで配布・1293 票の有効票を回収（うち男子票 601、女子票 686、性別不明 6、回収率 36.9 %）
a. 講義内で配布・回収、b. 九州アメフト連盟を通して加入校に配布・郵送で回収、c. 国立大学運動部連合会を通して当該大学の運動部に配布・調査員が回収
調査票作成・配布・回収：中村晋介、浅利宙、園井ゆり、森康司

2．体育会系女子学生のジェンダー観

本稿のもとになった調査票には、全 20 問＋フェイスシート 6 問を配置した（小問単位で計算すると全 130 問）。この調査票から規範意識に関係する質問 22 問を抽出した上で、因子分析による内部構造の解明を試みた。因子抽出法は最尤法、回転はプロマックス回転を選択した。まず天井効果・フロア効果を測定して 3 変数を除去し、19 変数を残して行列を回転させたが、中途でヘイウッド限界による不適解が出現したため、共通性や因子負荷量より判断してさらに 4 変数を除去して再分析、結果的に以下のパターン行列〔図表 1〕を得た。第 I 因子は「国旗や国家への愛着」、「生まれた国への同一視」、「文化的伝統の存続」

図表１：大学生のスポーツ・価値観に関する調査、因子分析結果

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	共通性
問20c：特別な行事の時には国歌や国旗を揚げるべきだ	**.797**	.063	.059	.007	.589
問20b：生まれた国や民族を悪く言われると嫌な気持ちになる	**.438**	.020	-.003	-.116	.183
問20e：国や民族の伝統的な文化やしきたりは、きちんと子どもに伝えるべきだ	**.403**	-.044	-.162	-.047	.211
問20d：国のために自分のやりたいことが制限されても仕方がない	**.355**	-.074	-.063	.187	.217
問20a：日本が経済発展したのは日本人が優秀だからだ	**.309**	-.141	.092	.009	.172
問10①a：家族にとって父親が威厳を保つことが大切だ	-.007	**.707**	-.060	-.031	.494
問10①d：男性は外で働き、女性は家庭を守るべきだ	-.014	**.555**	-.057	-.045	.339
問10①e：長男には特別な役割がある	-.054	**.447**	-.012	-.063	.246
問10①b：家の中のことは母親がリーダーシップをとるべきだ	.036	**.444**	-.013	.105	.176
問12b：就職や単位など、先のことを考えるより、今を楽しむことが大切だ	-.009	-.034	**.668**	-.020	.451
問12a：無理して勉強しなくても、留年しない程度の成績でよい	-.028	-.049	**.607**	-.027	.368
問17②b：深夜アニメに関心がある	-.161	.008	-.021	**.595**	.345
問17②c：インターネットの掲示板やホームページのうわさに関心がある	.079	-.070	-.022	**.553**	.303
問17②a：ヒップホップ、ストリート系、ギャル系のファッションに関心がある	.043	.040	.162	**.244**	.121

抽出法：最尤法　　回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法
共通性：因子抽出後の共通性
因子分析適合度の検定　χ^2=200.74 (df=41)　$p<0.0001$

因子相関行列

因子	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ
Ⅰ	1.000	-.513	-.032	.154
Ⅱ	-.513	1.000	-.099	-.201
Ⅲ	-.032	-.099	1.000	.279
Ⅳ	.154	-.201	.279	1.000

などの変数に高い負荷量を示しているが故に、「ナショナリズムへの親和度」と命名できる。第Ⅱ因子は「保守的なジェンダー観への親和度」（内容は後述）と命名、以下、キャリア形成に関する長期的ヴィジョンに対して反対の感情を示す第Ⅲ因子は「享楽志向への親和度」、インターネットやアニメと連関が深い第Ⅳ因子は「サブカルチャーへの親和度」と命名した。

続いて回答者それぞれに対して、これら４因子に関する因子得点を算出し、Ｚ得点に変換した。これらをそれぞれ「ナショナリズムへの親和度得点」、「伝統的ジェンダー観への親和度得点」「享楽志向への親和度得点」「サブカルチャーへの親和度得点」と呼称する。

まず、本稿の中心的主題である「保守的なジェンダー観への親和度得点」に注目する。対象者から女子学生のみを取り出し、体育会系の女子学生とそれ以外の女子学生との間で差があるか否かを調べたところ、体育会系の女子学生グループの得点（.156）は、それ以外の女子学生の得点（－.762）よりも有意に高かった（t=2.78、df=641、p=.006）。

〔図表１〕で見たように、この因子に負荷量が高い変数の全ては、家族のあり方に関する設問であった。紙数の関係で詳細は省略するが、本調査に配置した結婚観を問う質問群のうち、上記の因子分析に使用されなかった変数のほぼ全てと、この得点との間には有意な連関が見られた（得点を従属変数に置いた一元配置分散分析による）。保守的な結婚観を持つ者ほど、この得点の値が高くなっていたのである。この得点は、女子学生が抱く家族観や結婚観のあり方全体を反映していると考えらる。したがって、体育会系の女子学生はむしろそれ以外の女子学生よりも保守的なジェンダー観を抱いていると結論される。

対象を体育会系の女子学生に限定した上で、男性と女性との身体能力の差異に関する認識と保守的なジェンダー観との関係性を探ったところ、有意な連関は見られなかった。具体的には、調査票に配置された「男子と女子が対戦する場合、男子は手かげんした方がよい」という設問に対する賛否（「そう思う～まあそう思う」、「どちらでもない」、「あまりそう思わない～そう思わない」の３群に整理）を独立変数、保守的ジェンダー観への親和度得点を従属変数とした一元配置分散分析を実施したが、特に平均点の差は出現しなかったのである。体育会系の女子学生が抱くジェンダー観は確かに保守的であったが、少なくとも今回の調

査を通しては、その原因が運動能力の差異に関する認識にあると明言できない。

なお、対象を体育会系の女子学生に限定した上で、保守的なジェンダー観に対する親和度得点を核家族／３世代同居家族で比較したが、特に有意な連関は見いだされなかった。また、1995 年度 SSM 調査の質問文を援用して、文化資本の概念から出身階層を推定した上で、階層上位、中位、下位グループの間で親和度得点を比較したが、この場合も有意差はあらわれなかった[6]。

３．体育会系女子学生が抱く各種の意識

ついで、女子学生が抱くその他の意識（ナショナリズムに関する意識、結婚式の進め方、友人関係の規範意識、社会に関する関心、大学生活充実度など）についても、体育会系の女子学生とそれ以外の女子学生とを対比させつつ議論を進める。なお、調査自体が大部のものであることも勘案して、３章ではファインディングスの状態でさまざまな議論を提示し、４章でそれらファインディングス群をもとに１つの理念型を錬成する方針を採用したい。

３．１　結婚観

対象を女子学生に限定した上で、体育会系のグループとそれ以外のグループで結婚に関する規範意識を比較したところ、体育会系の女子学生は、①「ある程度の年齢までには結婚した方が良い」（χ^2=13.94、df=3、p=.003）、②「家庭のために、自分のやりたいことが制限されても仕方がない」（χ^2=7.16、df=3、p=.067）③「結婚したら子どもは持った方がよい」（χ^2=9.52、df=3、p=.023）、④「結婚している人は社会的信用がある」（χ^2=6.96、df=3、p=.073）と答える傾向があった。一方、⑤「結婚は家と家のつながりである」、⑥「外国人と結婚してもよい」、⑦「女性が結婚しないまま子どもを産み育てることがあってもよい」、⑧「子連れの再婚があってもよい」、⑨「男女が一緒に暮らすなら、きちんと結婚して籍を入れた方が良い」といった項目に関しては、体育会系の女子学生とそれ以外の女子学生との間で有意差は見いだされなかった。⑩具体的な結婚式の進め方に関する設問（昔ながらのやり方でおこなう／自由なやり方でおこなう）に関しても、体育会系の女子学生とそれ以外の女子学生との間に有意差はあらわれなかった。

体育会系の女性に限定して、これら変数と伝統的ジェンダー観との親和度得点との連関を調べたところ、①結婚式の進め方は伝統的なやり方でおこなうべきとの意見（$F(3, 207)=6.34$、$p<.0001$）、②夫婦別姓への反対意見（$F(3, 206)=5.58$、$p=.001$）、③安易な離婚への反対意見（$F(3, 207)=4.26$、$p=.006$）、④家庭のための自己犠牲を肯定する意見（$F(3, 206)=6.09$、$p=.001$）、⑤結婚は家と家のつながりであるという意見（$F(3, 206)=10.87$、$p<.0001$）の５項目で有意な連関（いずれも伝統的なジェンダー観への親和度得点が高い）が現れれた。その一方で⑥「ある程度の年齢までには結婚した方が良い」との意見に関してはやや弱い連関（$F(2, 207)=2.18$、$p=.091$）、⑦「結婚したら子どもを産むべき」「国際結婚もＯＫ」「シングルマザーもＯＫ」「子連れの再婚があっても良い」との意見に関しては連関が見られなかった。４章で改めて言及するが、体育会系の女子学生においては、①～③、⑤のように、結婚および家族の儀礼的側面や法的根拠に裏付けられた形式的側面を肯定する意見と、伝統的なジェンダー観への親和度との間に限って正の連関が生じる傾向が顕著に見られると言ってよいだろう。

３．２　スポーツに関する評価

スポーツに関する評価に関する４つの設問について、体育会系のグループに所属する女子とその他の女子学生を比較すると、全ての項目において体育会系のグループに属する女子の肯定感が高かった。具体的には、①「スポーツは健康維持に役立つ」（$\chi^2=16.49$、$df=3$、$p=.001$）、②「スポーツはストレス解消になる」（$\chi^2=27.57$、$df=4$、$p<.0001$）、③「スポーツは根性や忍耐力を養う」（$\chi^2=56.46$、$df=4$、$p<.0001$）、④「スポーツは仲間意識をはぐくむ」（$\chi^2=33.60$、$df=4$、$p<.0001$）の４項目である。なお、これら４設問と伝統的ジェンダー観への親和度得点との間には有意な連関は見られなかった。

３．３　大学生活全体に関する意識

「大学生活において一番充実していると感じる時」を質問した場合、体育会系の女子学生は「部活・サークル・同好会などの活動をしている時」と答える傾向が高まり、それ以外の女子学生では「友人と雑談、食事、コンパ、ドライブなどをしている時」と回答する者が全体の半数近くを占めていた（$\chi^2=97.25$、

df=6、p<.0001）。

選択肢をある程度統合した上で、対象を体育会系の女子学生に絞り、所属する部活動・サークル・同好会のレベル（強豪かそうでないか）と「充実していると感じる時」とをクロスしたところ、一定レベル以上の「強さ」を持つ集団に属している女子学生のグループで「部活・サークル・同好会などの活動をしている時」と答える傾向が見られた〔図表２〕。

「所属している部活、サークル・同好会などの練習やミーティングと、出席に厳しい講義・ゼミとの日程が重なってしまった場合」に「どちらに出席するか」と質問したところ、体育会系の女子学生はそれ以外の女子学生よりも「部活・サークル・同好会活動に参加する」と回答する傾向が高かった（χ^2=58.104、df=5、p<.0001）。この設問においても、所属する部活動が「県内では強豪」レベルの集団に属する女子学生で、「部活・サークル・同好会活動に参加する」という回答が増えていた（χ^2=18.49、df=8、p=.018）。

図表２：大学生活において充実している時間

		講義 勉強	友人と 交流	部活動	その他	合　計
県レベル以上の強豪	(n= 36)	16.7%	22.2%	55.6%	5.6%	100.0%
県内では強豪	(n= 26)	5.0%	20.0%	65.0%	10.0%	100.0%
強豪ではない	(n=106)	16.0%	35.8%	33.0%	15.1%	100.0%
全　　体	(n=142)	17.7%	56.8%	21.2%	4.3%	100.0%

χ^2=12.20（df=6）　p<0.01

「全体として現在の大学生活に満足しているか」と質問したところ、体育会系の女子学生はそれ以外の女子学生よりも肯定的な回答を返す者が多かった〔図表３〕。ただし、この設問と所属集団の「強さ／レベル」との連関は特に見られなかった。

図表３：大学生活への満足度

	満　足	どちらかといえば満足	どちらかといえば満足	不　満	合　計
体育会系の女子学生（n=212）	22.2%	59.4%	16.5%	1.9%	100.0%
それ以外の女子学生（n=438）	15.5%	55.5%	23.5%	5.5%	100.0%
全　　体　　（n=650）	17.7%	56.8%	21.2%	4.3%	100.0%

χ^2=11.42（df=3）　p＜0.01

３．４　友人関係・親子関係に関する規範意識

体育会系の女子学生とそれ以外の女子学生を比較すると、体育会系の女子学生は、「同じ大学に通う友人数」が増える傾向を持つ（χ^2=42.50、df=5、p<.0001）〔図表４〕。また、当然のことであるが、体育会系の女子学生は「部活動・サークル・同好会などを通して知り合った友人の数」を多く答える傾向が見られた（χ^2=132.74、df=4、p<.0001）。また、「みんなと協力しても、結局は一部の人の利益になってしまい、正直な人が損をする」という質問への賛否を訊ねたところ、体育会系の女子学生は、それ以外の女子学生よりも反対する人が多かった（χ^2=8.59、df=3、p=.035）。なお、「携帯電話を持っていないと友人に取り残される」という質問に関しては有意差は見られなかった。

図表４：同じ大学に通う友人数

	とくにいない	1～2人	3～5人	6～9人	10～19人	20人～	合 計
体育会系の女子学生（n=203）	2.0%	.0%	2.5%	16.7%	30.0%	48.8%	100.0%
それ以外の女子学生（n=431）	1.9%	2.6%	14.8%	24.4%	26.7%	30.6%	100.0%
全　　体　　（n=650）	1.3%	1.7%	10.9%	21.9%	27.8%	36.4%	100.0%

χ^2=42.50（df=5）　p＜0.001

体育会系の女子学生は、それ以外の女子学生よりも「同じゼミや部活、サークルの人でも、気が合わない人とは話をしなくても良い」という意見を抱く傾向がある（χ^2=15.66　df=3、p<.0001）。しかしその一方で、「友人の話がつまらな

くても話を合わせた方が良い」という設問に関しても肯定的な回答を示す傾向があった（χ^2=8.95、df=3、p=.030）。

親との関係（親と会話するか、親との関係は良い方だと思うか、実家にいる時は家事を手伝うか、親から仕送りや小遣いなどの金銭的援助を受けているか）については、体育会系の女子学生とそれ以外の女子学生との間で有意差は見られなかった。また、この中で「実家にいる時は家事を手伝う」という設問に対する賛否と、伝統的ジェンダー観への親和度得点との連関についても調べたが、体育会系の女子学生、それ以外の女子学生のいずれにおいても有意な連関は見られなかった。

３．５　社会に関する意識

図表５：社会への関心

世界で起こっている戦争や経済問題への関心	関心がある	どちらかといえば関心がある	どちらかといえば関心はない	関心がない	合　計
体育会系の女子学生 (n=214)	24.8%	57.0%	18.2%	0.0%	100.0%
それ以外の女子学生 (n=440)	32.5%	55.5%	10.9%	1.1%	100.0%
全　体 (n=654)	30.0%	56.0%	13.3%	0.8%	100.0%

χ^2=11.16、df=3、p=.011

友人の就職先や進学先への関心	関心がある	どちらかといえば関心がある	どちらかといえば関心はない	関心がない	合　計
体育会系の女子学生 (n=214)	35.5%	46.3%	15.9%	2.3%	100.0%
それ以外の女子学生 (n=442)	24.9%	54.3%	15.8%	5.0%	100.0%
全　体 (n=656)	28.4%	51.7%	15.9%	4.1%	100.0%

χ^2=56.46、df=3、p=.019

「世界で起こっている戦争や経済問題」「日本の高齢者問題や経済不況」「自分が住んでいる地域の自治会や町内会・ボランティア団体の活動」「友人の就職・進学希望先」の４項目について回答分布を比較したところ、体育会系の女子学生はそれ以外の女子学生よりも「世界で起こっている戦争や経済問題」に関心が

低く、「友人の就職・進学希望先に対する関心が高かった」（それ以外の項目では有意差なし）〔図表５〕。体育会系の女子学生に限定して、これらの設問と伝統的ジェンダー観への親和度得点との連関を調べると、友人の就職・進学希望先に対する関心についてのみ僅かな有意差（関心がある層は保守的ジェンダー観への親和度得点が高い）が現れた（F(2, 207)=2.36、p=.072）

３．６　ナショナリズムに関する意識

体育会系の女子学生とそれ以外の女子学生で「ナショナリズムに関する親和度得点」を比較する。体育会系の女子学生とそれ以外の女子学生の得点を単純に比較すると、体育会系の女子学生の平均点（.181）は、それ以外の女子学生の平均値（－.089）を有意に上回っていた（t=3.24、df=641、p=.001）。

対象を体育会系の女子学生に絞り込んで、「ナショナリズムに関する親和度得点」と近所の人との会話状況（あなたは、近所に住んでいる人と話をしたり、あいさつをすることがありますか）、地域活動への参加状況（地域の活動やボランティアに参加していますか）、現住地への愛着（現在、自分が住んでいる地域が好きですか）の３変数で平均点を比較したところ、近所の人との会話が「全くない」と答えるグループがこの得点が高く（.425）、近所の人との会話が「よくある」と答えたグループで得点（－.320）が低くなっていた（F(3, 208)=2.79、p=.038、他の変数では有意差なし）。

もう少しこの点を追求してみよう。女子学生全体を１つのまとまりとした上で、３．５で利用した「社会に関する意識」の４項目への回答とナショナリズムへの親和度得点との連関を調べたが、全てにおいて有意差は見られなかった。また、「ヒップホップ系・ギャル系・ストリート系」のファッション、「インターネット」、「車の改造」などの若者文化に関しても同様の分析をおこなったが、有意差が出たのは「インターネットの掲示板やホームページで流れているウワサ」だけであった。この項目に「関心がある」と答えたグループの平均得点（.583）は、「関心がない」「どちらかと言えば関心がない」と答えたグループの平均得点（それぞれ－.127、－.137）よりも有意に高かったのである（F(3, 207)=2.85、p=.035）。同世代の若者に対する批判的な意見への賛否とこの点数との関係を調べたが、「伝統文化やしきたりを無視している人が多い」と答えた者

の得点がやや高くなっていた（F(3, 207)=2.61、p=.053）程度で、基本的には有意な連関は現れなかった[7]。続いて、「知識人不信」（政治家や学者の考え方は、ふつうの国民の感覚とずれている）、「政治不信」（国際政治の場面において、日本政府はもっとはっきり意見を言うべきだ／誰が首相や国会議員になっても、私たちの生活は変わらない）、および、ゼノフォービアに関する質問群に対する回答分布と、この得点との連関も調べたが、女子学生全体、体育会系の女子学生に限定した場合、その他の女子学生に限定した場合の全てにおいて有意な差は現れなかった[8]。

4．小　括

4．1　形式的な保守意識

体育会系の女子が抱くジェンダー観念が保守的かリベラルかと問われれば、「保守的」だと答えざるを得ない。本稿２章で見たように「保守的なジェンダー観への親和度」因子は、「家庭にとって父親が威厳を保つことが必要だ」「長男には特別な役割がある」といった質問文＝パターナリズムへの親和度に関する質問、及び「男性は外で働き、女性は家庭を守るべきである」「家の中のことには母親がリーダーシップをとるべきだ」と言った伝統的性別役割分業をそのまま問うた質問文に高い因子負荷量を示していたからである。また、このジェンダー観は、彼女たちの家族観や結婚観とも緊密に結びついていた。

しかしながら、焦点を体育会系の女子学生に絞り込んで分析を進め、さまざまな知見を累積させると、いささか奇妙なことが発見された。３章１節で見たように、結婚に関するリベラルな認識（結婚したら子どもを生むべき、愛し合っているのなら外国人と結婚しても良い、シングルマザーも OK、子連れの再婚があってもよい）と、この「保守的なジェンダー観」との間には有意な連関は見られなかったのである。「保守的なジェンダー観」を強く持つ層が、DINKS や国際結婚、シングルマザー、ステップファミリーに反対している訳でもないし、それをあまり持っていない層が、これらリベラルな意見に賛成している訳でもない。また体育会系の女子学生のうち「実家に居るときには家事を手伝う」者が、保守的なジェンダー観を強く抱いている傾向も見られなかった。家族構成や出身階層と

も無関係であることも既に指摘している（２章）。

これらを手がかりに、今回の分析で明らかになった知見を再び俯瞰すれば、体育会系の女子学生が抱く「保守的なジェンダー観」が、その外貌のみが「保守的」であること、換言するならば極めて形式主義的・表層的な形での「保守」性のみを担保しているに過ぎないことが理解できる。今回明らかになった「保守的なジェンダー観」とは、「結婚式の進め方」「夫婦の姓のありかた」「離婚」「結婚後の実家、配偶者との実家との関係性」といった型式面においてのみ「保守的な伝統」を維持する方向で作用するものである。だからこそ、この観念はリベラルな結婚観・家族観とも矛盾なく共存し合えるのだ。

このような「保守」意識を「形式主義的な保守意識」と呼ぶことにしよう。ここでいう「保守」は、国粋主義的や全体主義をも励起しかねない従来型の「保守」イデオロギーとは全面的に異なる発想である。ここにあらわれているのは、身近な生活世界のみを対象にした「夫婦は同姓を名乗るべきだから夫婦同姓にすべき」「結婚したら女性が家を守るべきだから、女性は家を守るべき」といったトートロジーの卓越にほかならない[9]。

この形式主義的な保守意識は、ナショナリズム親和度得点の分布状況にも看取できた。３章６節で見たように、体育会系の女子学生は、確かにそれ以外の女子学生よりもナショナリズム親和度得点が高かった。そして確かに〔図表１〕を見る限りにおいて、このナショナリズムとは、国旗や国家を尊重し、日本人の優秀性やプライドに担保されたものであるようにも見える。しかしながら、この得点もまた、当該女子学生と実際に生活している地域／生まれた地域との関係性の強さとは無連関に出現しているし、ゼノフォービアや知識人不信に裏打ちされたものでもない。ナショナリズムへの親和度得点が高い女子学生は、実生活の中で生まれた地域への愛着を拡大させることで「日本が好き」と考えている訳ではないし、日本人と他の民族とを具体的に比較をした上で「日本人が優秀だ」と結論づけてもいない。また近年の保守回帰現象をリードする一部の論客たちの言説の背景に現前している「公共心を忘れた今どきの若者」に対するルサンチマンとも無関係である。それらの概念とは無関係に、彼女たちは日本を「好きだから好き」、日本人は「優れているから優れている」、「国旗は揚げるべきものだから揚げるべき」と考えている。ここにもトートロジックな論理の卓越を見ることが

可能である。

「保守的ジェンダー観への親和度」と「ナショナリズムへの親和度」は、両者が形式主義的・トートロジックであるという構造的な相同性の故に、体育会系の女子学生の意識上で接着される。「男性は外で働くべき」と考えること、「家事は女性がとりしきるべき」と考えること、「生まれた国に愛着を持つ」こと、「国旗を揚げたり国歌を歌う」ことは、その全てにおいて極めて形式主義的かつ無根拠に遵守されるべき一種の規範として、現実の行動からは微妙に切り離された位置を保つ。そうであるが故に、ジェンダーやナショナリズムに関する彼女たちの「保守」的な観念は微妙に、しかし脈絡と再生産を繰り返していくだろう。

この観念の再生産が、「常識」や「伝統」という美名のもとに、社会に流通するジェンダーの非対称な関係、あるいは構造的不平等を、それこそ形式主義的に領有していく受け皿として機能していくことは想像に難くない。

４．２　明るい保守意識

「新しい教科書をつくる会」の神奈川県支部「史の会」を現代日本における「保守回帰現象」の典型と位置づけ、その動向を考察した小熊英二は、この会に参加している「保守」的な若者たちに共通する感情として、中間集団の崩壊や現代社会における価値観の多様性によって生じた「物語の不在」に裏打ちされた「不安」の存在を看破した。「史の会」に参加している若者たちは特定のイデオロギーを抱いているのではない。若い会員たちは、既存のイデオロギー（それは左翼的なもののみならず、右翼的なものも含まれる）から距離をとる。そこで生じた不安の中で、自らが依拠すべき新しいイデオロギーを探している点で共同性を担保していると小熊は指摘する（小熊 1999:204）。そうであるが故に、会員たちは従来型の「右翼」にも嫌悪感を示し、国家間の平和的な交流や、異文化や異なったイデオロギーを（少なくともある程度は）尊重する態度を示し、そして現在の状況に漠然とした不安を感じているのだ[10]。

形式主義的な保守意識を抱く体育会系女子学生の「保守」感覚は、一見すると「史の会」の若者たちに近い。彼女たちもまた「保守」的である一方で、他民族・異文化に対して偏見を持っていないし、リベラルな結婚観を全否定するような態度を示してはいないからだ。

しかし、「史の会」会員の若者たちと、体育会系女子学生との間には１つの大きな隔たりがある。体育会系の女子学生は「保守的」である上に「満足している」のだ（本稿３章３節、３章４節）。大学生活に満足しているグループはそうでないグループよりも保守的なジェンダーへの親和性得点が高かったし（t=2.31、df=207、p=.022）ナショナリズムへの親和度得点もやや高かった（t=1.74、df=207、p=.083）。

この要因として考えられるのは、彼女たちの「保守意識」が、運動部という「場」のあり方に影響を受けて成立した可能性である。友人関係や大学生活充実度に関するクロス集計結果に示されているように（３章３節、３章４節）、体育会系の女子学生は、大学における友人関係や大学での学校生活を体育会系の運動部、同好会、サークル」を中心に構成する傾向がある。体育会系の部活動で出会った人間が「友人」として認知され、それらの集団内で活動することが大学に通う意義となる[11]。特に所属する集団が一定レベルの「強さ」を持っている時にこの感覚は強くなる〔図表２〕。生活の中心軸をスポーツ活動に置いているが故に、彼女たちはスポーツに肯定的であり、友人と協力することを損得勘定で考えなくなる（３章２節、３章４節）。

①他の「場」とは隔絶して存在すること、②各種の儀礼的な「しきたり」――練習場に入る時に一礼する、運動用具を心をこめて磨く、新入生には半年間はボールを触らせないなど――を重んじること（しかもその理由は、「そういうものだからそうなのだ」というトートロジーに即したものである）、③成績よりも「正しい型／フォーム」を徹底的に修得させる練習方法がしばしば用いられるなど、わが国におけるスポーツ集団が、ある一定の身体技法の領有を働きかける「場」としての特性を強く持っていることは、既に社会学者や心理学者によって指摘されてきた（e.g.吉見 1999; 多々納 1997）[12]。実際、今回の調査でも、体育会系の女子学生は「集団内の先輩後輩関係は明白」と答えたグループほど、保守的ジェンダーへの親和度得点が高くなっていた（ F(3, 21)=2.79、p=.042）。

以上、本稿では体育会系の女子学生が、ジェンダーに関する非対称性や不平等性を容認する機序となり得る「形式主義的な保守意識」を抱いていること、そしてこの意識が、彼女たちが生活の中心に置いている運動部・サークル・同好会といった「場」の影響を受けて再生産されていることを明らかにした。現在所属し

ている運動部・サークル・同好会から彼女たちが卒業したとき、あるいは彼女たちが結婚し、母親となっていた時、現在彼女たちが抱いている型式主義的な保守主義は、彼女たちの生き方をどう方向付けていくのだろうか？。今後の研究を待ちたい。

◆本稿執筆にあたって、浅利宙氏、園井ゆり氏、森康司氏、窪田綾子氏、本多潤子氏との意見交換から大きな示唆を得た。謹んで感謝の念を示すものである。

注

1) ここにあげた中で、高井昌史（2005）の研究は「（男子）運動部の女子マネージャー」を対象に質的調査を実施したことで、アカデミズムに属さない人びとの関心をも集めた。しかしながら、高井自身が述べているように、同書の目的は「（男子運動部という場から生み出される）男性支配構造を女子マネージャーという事例から浮き彫りにさせること」（高井 2005:158）、すなわちセジウィック（1985=2001）が指摘した、ホモソーシャル的でミソジニックな「男同士の絆」が生み出されていく過程を読み解くことにあった。同書の中で提示される、女子マネージャー自身のジェンダー・アイデンティティに関する高井の説明は、この「男同士の絆」を補完的に強化するデバイスとして提供されるにとどまっている。むろん、高井が選んだこの位置は、日本におけるスポーツ集団で構築される「男同士の絆」の過程を解明するための橋頭堡として極めて適切なものである。

2) このような研究対象の偏りに、女子学生のスポーツ活動が不活発であったという歴史的事実――それ自体がジェンダー・バイアスの成果だと言えよう――があることは言うまでもない。

3) この仮説は森康司氏に示唆された。大束貢生（2004）は、「運動音痴の男性」は男性の目からも女性の目から見ても劣位に置かれる存在であることを指摘している。「運動が得意」な男子学生や女子学生が「運動音痴な男性」に対して見る目はより厳しいものになることが予想された。

4) 対象を女子のみに限定すると、体育会系の女子学生は高校でも運動部に所属していた比率が有意に高かった（χ^2=46.599、df=2、p<.0001）

5) 「体育会系の人間」とは本来、「○○大学体育会」を構成している「○○大学の運動部メンバー」という属性を記述する単語であった（航空部や探検部など、必ずしもスポーツとは言えない部活動が「体育会」に所属している場合も少なくない）。実際にいくつかの大学でおこなった聞き取り調査、および、本稿と並行しておこなわれた「『体育会系』のイメージ調査」の結果をもとに、本研究では、調査票を記入した時点で「運動系部活動、運動系サークル、運動系同好会」に所属していると自己申告した人を「体育会系の学生」というグループにまとめた。なお、筆者は「日本社会分析学会」第 110 回大会（2005 年 12 月）で、『体育会系』のイメージ調査」の結果を一部報告している。

6) 推定方法については（片岡 1998）を参照のこと。体育会系ではない女子学生に限定して分析をおこなった場合でも有意差は現れなかった。

7) その他に独立変数として利用したのは以下の質問文への賛否である。「公共の場でのマナーや道徳を無視している人が多い」「先輩や目上の人に対して生意気な態度をとる人が多い」「勉強や仕事よりも遊びを重視する人が多い」「政治や経済に関心を持たない人が多い」。これら独立変数として使用した質問文への回答は、すべて「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の４件法である。

8) ゼノフォービアに関する質問群とは、以下の４つの場面を想定して「受容」「不受容」を４件法で質問したものである。具体的には「外国人の一家が隣の家に引っ越してきた」「コンパをやっていると外国人グループが隣に座った」「相撲や柔道など日本の伝統的なスポーツで外国人が優勝した」「スポーツの国際試合で、日本選手や日本チームが批判を受けた」。

9) 「保守」であるとは、本来このような立場なのかも知れない。系譜学的に見ても、「伝統」や「普通」といった既成事実を基盤とする感覚に根ざした「保守」は、それらを破壊しようとするリベラルな主張（e.g.デモクラシー、コミュニズム、グローバリズム、ジェンダー・フリー）へのアンチテーゼとして、そういった「リベラルな思想」が成立した後に、それへの反動という形で登場してきたからだ（西部・秋山 1995:3-4）。

10) 小熊英二のもとで実際に「史の会」への参与観察をおこなった上野陽子は、この会の内部で、天皇制イデオロギーや軍国主義的発想に基づいた「従来型の保守主義」を担保している戦中派世代が、このような「新しい保守主義」を信奉している若いメンバーに違和感を抱いていることが報告されている（上野 2003:120-121）。

11) こう考えると、２章で抽出された第Ⅲ因子は、特に体育会系の学生の場合、単なる「享楽志向」というより「教育・学校文化を重視しない傾向」と解釈すべきであろう。

12) 女子のトップレベルスポーツに関する報道が、しばしば選手に対して、「スポーツの卓越によって得た『強い女』のイメージを補完する」かのように、女性役割（女らしさ、美しさ、かわいらしさ）を強調することを熊安貴美江や木村元子が指摘している（熊安 2003:124; 木村 1991）。筆者は、今回の調査研究の後に断続的に実施している運動部員への聞き取り調査の中で、体育会系の女子学生が「女性性において保守的であろうとする」ことの背景に、このような外部からの視線を領有している可能性を見いだしている。「形／身体技法」を覚え込むことで空虚になった意識（いわゆる「無私」「無我」の領域）が、この領有された視線によって方向付けられる時に、この視線の権力作用は最大の効果を発揮するだろう。稿を改めて、この問題を議論したい。

引用文献

Bourdieu, Pierre, 1992, *Langauage & Symbolic Power*, Cambridge: Polyty Press.

深沢宏, 1977,「児童の運動の参与に関する研究――運動部への加入から見た」『体育

社会学研究』No.6: 123-44.
羽田野慶子, 2004,「<身体的な男性優位>神話はなぜ維持されるのか」『教育社会学研究』No.75: 105-26.
川辺光, 1974,「学校運動部集団の日本的特質」『体育社会学研究』No.3:61-82.
甲斐健人, 2000,『高校部活の文化社会学的研究――「身体資本と社会移動」研究序説』南窓社.
片岡栄美, 1998,「家庭の文化環境と文化的再生産過程――正当文化と大衆文化」片岡栄美編『文化と社会階層（1995 年 SSM 調査シリーズ No.18）』1995 年 SSM 調査研究会.
木村元子, 1991,「女性スポーツ報道における性差別表現に関する研究」『体育・スポーツ社会学研究』No.10: 175-94.
熊安貴美江, 2003,「男女いっしょの体育は無理？――スポーツ・身体とジェンダー」天野正子・木村淑子編『ジェンダーで学ぶ教育』世界思想社: 119-34.
西部邁・秋山祐徳, 1995,『ポップコン宣言』光文社.
丹羽劭昭・種村紀代子・長沢邦子, 1989,「運動部の戦績を規定する集団の構造と機能」『体育・スポーツ社会学研究』No.8: 139-60.
岡本英夫, 2000,「スポーツとジェンダー」鈴木守・山本理人編著『スポーツ文化の現在（講座・現代文化としてのスポーツ』道和書院.
小熊英二, 2003,「『左』を忌避するポピュリズム――現代ナショナリズムの構造とゆらぎ」小熊英二・上野陽子『<癒し>のナショナリズム』慶応義塾大学出版会: 15-42.
大東貢生, 2004,「ジェンダーと運動音痴の男たち」飯田貴子・井谷惠子編著『スポーツ・ジェンダー学への招待』明石書店: 211-3.
Sedgwick, Eve K., 1985, *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*, New York: Columbia University Press （= 2001, 上原早苗・亀澤美由紀訳『男同士の絆――イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版会.
上野陽子, 2003,「〈普通〉の市民たちによる「つくる会」のエスノグラフィー」小熊英二・上野陽子『<癒し>のナショナリズム』慶応義塾大学出版会: 69-186.